

# 山と博物館

第50巻 第10号 2005年10月25日

市立大町山岳博物館



当日は地元中学生によって大会宣言が行われました

## 第六回ライチョウ会議山梨大会

ライチョウ会議事務局

今年で六回を数えるライチョウ会議は、昨年十一月に山梨県内のライチョウに関心を持つ各種団体を中心に実行委員会が組織され、依田正直実行委員長のもとライチョウ会議（会長・中村浩志、信州大学教育学部教授）・南アルプス市主催で今年八月二十～二十一日に南アルプス市立芦安小学校体育館を会場に高円宮妃殿下をお迎えして行われました。

報告は地域住民、研究者、行政らが参加して「南アルプスのライチョウの現状」を中心に報告やパネルディスカッションがなされました。

そのなかで、地球温暖化が南アルプスのライチョウに与える影響について、過去の資料からなわばり数が二八八と推定される南アルプスで、気温が $1^{\circ}\text{C}$ 上昇するとナワバリが二五（七八％）に減少し、 $2^{\circ}\text{C}$ 上昇すると八九（三二％）、 $3^{\circ}\text{C}$ 上昇した場合には十四（約五％）にまで減少すると推測し、そして、気温が $3^{\circ}\text{C}$ 上昇した時点で個体群の交流が途絶え、北岳周辺の集団と赤石岳周辺の集団に分断され、孤立する可能性を示唆しました。

またミトコンドリアDNAの解析から、古いタイプの系統が残っている南アルプスのライチョウは遺伝子多様性が極めて低いことが報告され、南アルプスでの生息数が七二〇羽以下と推定されるこの数値は一般に生物が環境の変動に対応できるだけの遺伝的変異を保つために必要な有効な個体数として提案されている五〇〇個体則に近い値であって、この値がライチョウにも当てはまるとするならば、南アルプスのライチョウは極めて危険な個体群ではないかとしています。

さらに、南アルプスのライチョウの生活を脅かすほかの要因として、おもに低地で生活していたはずのチョウゲンボウによる捕食や、ニホンザルやニホンジカによる高山植物の採餌によって植生が改変されつつあることが報告されました。これに対して会場からは、これらの動物が高山帯やライチョウにどのような影響を与えているのか、数値的因果関係からの究明が求められました。

このように、普段の生活ではなかなか気づかない現象が高山帯では大きな問題となつて生じています。そしてライチョウは現在、かなり危機的状況にあると私たちは認識したほうがよいでしょう。今後、調査研究で明確になつた問題が早期に解決し、大会でライチョウの危機的状況を聞くだけでなく、すこしでも生息環境が良好になりつつあるという事例発表がなされることを期待し、静岡県での第七回ライチョウ会議につなげていきたいと思ひます。

# 自然環境教育施設と学校教育

小林 毅

平成十四年に小中学校で総合的な学習の時間が始まってから、学校が、学校外の施設や組織と協力して行う授業が実施しやすくなったといわれる。いわゆるパートナーシップ事業（授業）だ。本稿では、自然環境教育施設と学校のパートナーシップについて、その現状と課題を整理し、事例を紹介して、今後のパートナーシップ事業の可能性をさぐりたい。（ここでいう自然環境教育施設とは、自然史博物館、ビジターセンター、ネイチャーセンター、自然観察センター等をさすが、本稿では特に自然系の施設に限定した話ではなく、歴史民俗系の資料館、美術館、科学館、青少年施設等においても活用できる話題だろう。）

## 学校教育における現状と課題

一方学校では、「先生が忙しい」「外部とつながりがいい（先生が名刺を持っていない）」「どこに協力してくれる組織、施設があるか、何ができるかわからない」「施設まで移動する交通手段（予算がない）」「外部に依頼しても指導を任せてしまう」「何をしたいかわからない」「授業を学校外で実施できるかどうか校長先生次第」といった状況がある。

自然環境教育施設における自然体験プログラムの対象者は、一般的にみると、少々特殊な層といえる。募集記事を見て申し込んでくる、ということ、参加者はすでに自然に興味関心があるということだし、さらに申し込む、という行動までできる人達だと考えることができるからだ。

自然環境教育施設において、このように関心層だけ相手にしてよいのだろうか。戦略がある場合は別として、意図なくプログラムを実施しているとしたら、そこに問題意識

を持たなければいけない。この状態を打開する手段は、様々な層をターゲットとしたプログラムを行うことだ。施設にふらりと立ち寄る、特に関心が強いわけではない人たちを引きつけてプログラムに参加してもらおうようにするのの一つだろう。学校のように、関心がある人もない人も一緒にいるグループをターゲットとすることも、施設の教育普及の重要な役割を果たすと思われる。

学校が施設の自然体験活動のノウハウを導入することができれば、現在、学校で環境教育といながら実際は環境問題教育をしている、環境について学ぶ、というところで止まっていたりしているプログラム内容に関してもよりよい方向にもっていくことができる。もし連携に障害があるとしたら、それは学校側だけの問題ではなく、施設側から学校へのアプローチ不足、連携意識・手法の不十分さ、といった視点でとらえるべきだと私は思う。

## さまざまな試みの事例

### ティーチャーズガイド

アメリカの国立公園では、学校に公園を利用してもらうために、学校向けの公園紹介のツールを作っている。それはカリキュラムガイド、と呼ばれ、公園の概要を紹介するビデオや施設や遊歩道等を紹介したパンフレット等に加えて、公園でできるアクティビティについて紹介した資料がセットで入っている。YMCAが運営する野外教育的な施設のフロストバレーでも、バインダー式の資料が使われていた。ヨセミテ国立公園の資料には、児童・生徒達を使う名札の原板や修了証のひな形まで含まれている【写真1、2、3、4】。

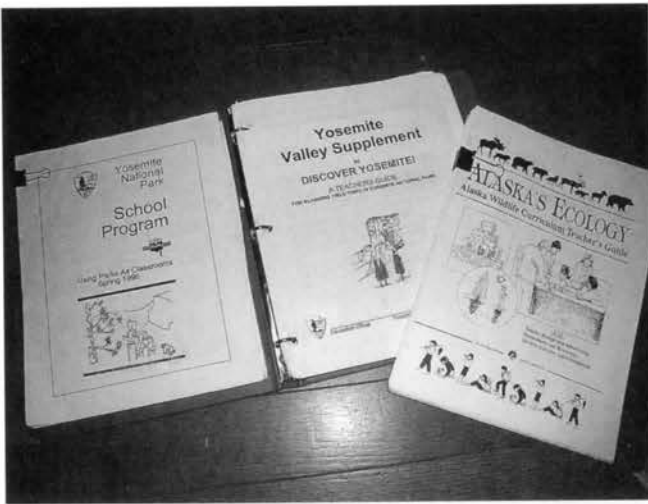
これらの資料の内、プログラムについてより詳しく紹介した資料がティーチャーズガイド、と呼ばれるものだ。この資料には、公園における学習プログラムのねらいや手順など、

実施方法が詳しく説明されている。ミシガン湖の南にあるインディアナ・デュニズ国立湖畔公園の環境教育センター（宿泊施設もある）では、事前に、学校の先生に対して子ども達と同じプログラムを実施している。

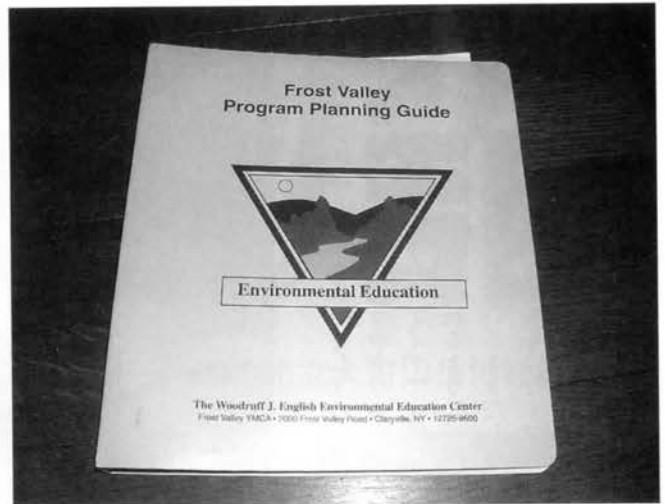
ティーチャーズガイドは本来、先生に自らプログラムを実施してもらうための資料なのだが、右の体験会や事前の説明に使うなど、公園の学習利用の広報資料ともなっており、公園と学校をつなぐためのツールになっているところが面白い所だ。

ティーチャーズガイドの特徴は、学校に利用してもらうために事前学習、公園での学習、事後学習（ウェブサイト、オンサイト、ポストサイトという）で構成されていることだ。もちろん、事前と事後、という部分は学校で実施する。その時には公園のレンジャーが学校を訪れることもある。事前学習がやりやすいように様々な学習教材が入ったツールの貸し出しもある。これらはレンタルボックスと呼ばれている。（アメリカの国立公園の学校向けの資料については、ホームページからダウンロードすることができる <http://www.nps.gov/>）。

これらを参考に、私が勤めていた東京都山のふるさと村では平成十一年に、それまでに実施していたプログラムを資料化し、初めてのティーチャーズガイドを作成した。しかし、残念ながら、ティーチャーズガイドを作成しても先生方がほとんど活用してくれず、という状況にはならなかった。それには広報不足と言う理由に加えて、学校の指導要領と同じ様式ではなかったことや、学校のカリキュラムとの関係が明瞭でなかった、というような理由が考えられた。このことから教訓として



【写真2】ヨセミテ国立公園、アラスカの国立公園のティーチャーズガイド



【写真1】フロストバレーの先生向け資料



【写真4】同ティーチャーズガイドの箱の中身



【写真3】エバーグレイズ国立公園のティーチャーズガイド

学んだことは、私たちが作りたい資料を作るのではなく、先生達が使いやすい資料を作らなければいけないということだ。必要なのは、専門家向けの資料ではなく、環境教育を実施してみたいが、どうやっていいかわからない」という先生をターゲットにした、使いやすい資料だったのである。

### ティーチャーズ

#### ワークショップ

先生方が環境教育のプログラムにふれ、実施の仕方について学べるような研修会も実施されている。しかし、残念なことに、参加してくださる先生が少ないのが現状だ。高知県や静岡県の事業では、教育委員会を通じて学校に連絡をしてみたが、参加者は多くなかった。

とはいえ、参加いただいた先生方は、環境教育実践のためのコツをつかまれ、学校に戻ってから活発に実践されている。NGOとのネットワークができることも喜ばれる。

近年では、教員の五年研修、十年研修などの中に環境教育を学ぶコースを入れ

る試みもされてきているし（静岡県など）、大学の教職課程の段階で、先生の卵が全員キャンピングして自然体験活動を学ぶしくみをつくっている大学も出てきた（玉川大学など）。こういった研修のニーズは今後増えていくだろうと思う。官民が連携して研修を実施し続けることは、施設側の重要な役割である。

### その他の様々なツール

先に紹介したレンタルボックスは日本でも作られている。クマについて学習するトランクキットや漂着物等について学習できるトランクミュージアム（クリーアップ全国事務所）などがユニークだ。その他、博物館では様々な貸し出し学習キットが用意されている。

また、展示を見てセルフで学習できるようなワークショップやワークブック（もともとは美術館で始まったもの。国立科学博物館、琵琶湖博物館、横浜スーラシア、東京ガス環境エネルギー館等）など、学校の利用を促すための様々なツールも作られている。

以上の様々な教材は、これを作れば必ず学校と施設が連携できる、というものではない。学校側がツールの存在を知り、ニーズとフィットした時に初めて功を奏するのだろう。さらに、学校側にそれらの存在を知らせるための方法も確立しておく必要がある。ホームページに情報を掲載し、しかもアクセスしやすいようにしておくことは非常に重要だ。

### コーディネーターが大切

山のふるさと村では総合的な学習の時間が導入された後、段々と学校の利用が増えている。以上に紹介した工夫もしてきたのだ



【写真5】山ふるにおける学校対応のようす



【写真6】ちょっと工夫をすると参加者をひきつけられる（参加者の表情に注意！）

が、一番の要因は、問いあわせをしてきた学校に対して、魅力たっぷりにプログラムの紹介をしたり、予算のつけ方のアイデアを出したり、行ってみたい、と思われるような、相手の立場に立った対応をしていることだと考えている。つまり、学校と施設をつなぐコーディネーターの役割をいねいに実践しているのだ。

コーディネーターの重要な役割は、サービ

ス精神ともう一つ、これまでの授業の経過や参加者の自然体験の様子、何を達成したいのか、といった授業の目標を、事前に確認することだ。場合によってはこちらから授業計画の提案をすることもある。目標とプログラムの関係について説明をすることさえある。学校対応のプログラムは、問いあわせの連絡があったその瞬間から始まっているのだ。

以上、自然環境教育施設と学校がパート

ナーシップをとる方法について述べてきたが、本来一番大切なのは、プログラムの質だ。プログラムは楽しくて面白くありたいが、楽しいだけではいけない。感性のプログラムばかりでも、自然観察だけでも、自然の知識の伝達だけでもいけない。施設では、環境教育で身につけるべき能力がきちんと分析され、その達成を目標にしたプログラムが提供できるようにしたものだ。プログラムのあり方については、機会を改めてふれたいと思う。

● 自然教育研究センター  
代表、山のふるさと村  
スーパバイザー、イン  
タープリテーション協会  
代表)

※ユニークなパートナーシップ事業について  
教えてください。

【連絡先住所】  
〒一九〇一〇〇三三  
東京都立川市錦町二一―一二二  
（株）自然教育研究センター

URL : <http://www.ces-net.jp>  
E-mail : [tk5884@world.email.ne.jp](mailto:tk5884@world.email.ne.jp)

お知らせ  
大町山岳博物館友の会では、随時、新会員を募集しています。  
友の会は、自然や文化に関心を持つ人たちの集まりです。会員相互の知識向上を図るとともに、博物館の各種事業に協力することを目的としています。

● 会員特典  
▽会員証の提示で博物館へ無料入館できます  
▽博物館機関誌「山と博物館」（月刊）、友の会誌「ゆきつばき」（年刊）、友の会会報「ゆきつばき通信」などをお届けします  
▽友の会主催・共催の行事に参加できます  
▽友の会オリジナル・バッジを購入できます  
▽心がいつも北アルプスとつながります

● 入会方法  
友の会事務局（博物館内）へお出でいただき直接お申し込みいただくか、申し込み用紙をご請求いただき、必要事項をご記入の上、ご返送ください。入金を確認次第、会員証などをお送りいたします。

▽年会費 個人会員 三五〇〇円  
ファミリー会員 四〇〇〇円

▽納入先（郵便振替）  
加入者名 山博友の会  
口座番号 〇〇五五〇・二二四一九四

● 問合せ先  
〒三九八―〇〇〇二  
長野県大町市大字大町八〇五六―一  
市立大町山岳博物館内 山博友の会事務局  
電話&FAX 〇二六一―二三一六三三三

山と博物館 第50巻 第10号  
発行 二〇〇五年十月二十五日発行  
〒398-0002 長野県大町市大字大町八〇五六―一  
市立大町山岳博物館  
TEL 〇二六一―二三一〇二二  
FAX 〇二六一―二三一〇二二  
E-mail: [enri@sanpakut@city.omachi.nagano.jp](mailto:enri@sanpakut@city.omachi.nagano.jp)  
URL: <http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpakut/>

印刷 株式会社 印刷  
定価 年額 一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）  
郵便振替口座番号 〇〇五五〇―七―三三三三